

書評

村上泰子

谷口 祥一, 緑川 信之 共著

知識資源のメタデータ

勁草書房, 2007.5
 viii, 248p 22cm 定価2,800円(税別)
 ISBN 978-4-326-00031-9

はじめに

本書は筑波大学図書館情報専門学群で講義科目「情報組織化論」(2007年度から「知識資源組織化論」)を担当する著者らが、そこで教授する内容を一冊に纏め上げたものである。

読者はまず、「はじめに」で書名の由来と全体の構成を読み、全体像をつかんでおくのがよい。なぜなら、司書課程科目の「資料組織概説」に近い主題範囲が取り扱われている本書ではあるが、伝統的な資料組織論の展開に馴染んでいる読者は、第1章を読み進めるにあたって戸惑いを感じるかもしれないからである。それは、本書が図書館における資料組織化のみを前提とするのではなく、より広範な場面での、著者らの言う「知識資源」の組織化全般に通ずる理論展開が目指されているためである。しかし、伝統的な資料組織論の知見はもちろん無視されているわけではない。それらは第2章と第3章に巧みに配置されていることを後で知ることになる。

本書では、記述目録法に相当する部分を谷口が、主題分析法に相当する部分を緑川が執筆している。前者は、「記述目録法のための三層構造モデル」以来発表して来られた谷口理論のある種の集大成と見ることができよう。また、後者は、緑川氏の著書『本を分類する』が下敷きになっている。

本文は以下の5章から構成される。

- 第1章 知識資源とその組織化
- 第2章 メタデータの設計
- 第3章 メタデータの作成と提供
- 第4章 知識資源の主題分析
- 第5章 ネットワーク知識資源のメタデータ

第1章「知識資源とその組織化」

本章では、知識資源を「人間の知的活動によって生産された知識を何らかのメディア上に体現したもの」と定義した上で、「組織化」という過程を、知識を知識資源に組織化する過程と、そのようにして組織化された「知識資源」をさらに組織化して、メタデータを作成する過程とに分けて提示している。そして本書では後者のみを取り扱われることが示される。ここでいう「メタデータ」とは、ネットワーク情報資源の組織化において頻繁に用いられるそれだけではなく、図書館目録などをも広く含む概念である。そして、この「メタデータ」設計の手順を、概念設計、レコード/データ項目設計、データベース論理・物理設計という3段階を軸にとらえ、以下の枠組みに沿って展開している。

第2章「メタデータの設計」

本章では、パリ原則で表明された目録の機能を、実体関連分析の手法を用いて概念モデルとして形式化するところから出発する。次にFRBRのモデルを同様の手法を用いて分析し、両者を比較することにより、後者が前者よりも書誌的事象を明確に表現できていることに注意を喚起する。それと同時に、目録以外のメタデータにも言及し、モデル設計のコンセプトの違いを指摘する。

続く「レコード設計」および「データ項目設計」でもまた、パリ原則に基づく概念モデルとFRBRのモデルを導入した場合との相違点、目録以外のメタデータとの違いが明示される。

第3章「メタデータの作成と提供」

本章では、第2章の末尾で扱われている「データベース設計」を受けて、検索システムの基本構成とその設計、メタデータ作成のタイプとその支援システムについて述べられている。メタデータの作成とその検索とは表裏一体の関係にあるが、資料組織化といったときに、検索システムまで扱うものはそう多くはない。転置ファイルの構成や文字表現の正規化、Nグラムにまで言及した本章の目配りのよさを感じられる。

第4章「知識資源の主題分析」

本章は主題分析法の概説であり、分類法と件名法

January 2008

村上：書評『知識資源のメタデータ』

(シソーラス含む)を取り上げている。出来上がった分類表やシソーラス/件名標目表をどう使うのかということよりも、こうしたツールをどのようにして作成するのか、という原理に主眼が置かれている点が特徴的である。本章に読み進む前に、いま一度第1章の最終節1.3「知識資源の主題分析」に目を通しておくとよい。主題の表現方法には、分類や索引のほかに、要約・翻訳・解説などもあるとした上で、知識資源の組織化によく使われるものとして分類と索引を取り上げ、特に索引の自由語と統制語の得失について詳述されている。

第4章は1.3の内容を踏まえて、分類から始まる。ここでは包括性、相互排他性といった区分原理の解説に例をまじえて多くの頁が割かれている。緑川は複数の区分原理適用時の問題点について、区分を「階層構造」(ツリー構造)で表した場合と「多次元(二次元)構造」(マトリクス構造)で表した場合とを図示し対比する。その上で、区分原理の適用順序が予め決まっていた、ときに利用者の自由な探索要求に対応できない階層構造よりも、適用順序の制約を受けない多次元構造のほうが、柔軟で主題表現力が高いと結論づけている。そして両構造の違いが最もよく現れるのが書架探索であるとし、階層構造による配置は利用者にとって探索の困難を生じざるを得ないとする。多次元構造による書架探索の説明は、物理的な書架ではなく、電子の世界における探索までも視野に入れたものであると考えれば理解できる。

伝統的図書館における資料配架に囚われないこうしたアプローチは、『本を分類する』の中で触られている著者自身の自動分類への関心にも繋がる野心的な試みであると言えよう。もっとも、分類には知識資源の主題を記号で置換するといういわゆる主題表現力以外に、知識の順序付けも含めたひとつの体系を構築するという役割が与えられてきたはずであり、その点についての言及がないように思われるのは残念である。

続いて、知識資源に索引語を付与するための用語リストの作成事例として、シソーラスが取り上げられている。この部分はシソーラス構築法および索引技法の標準的な解説である。シソーラスに採録される用語の収集対象と収集方針、収集された用語間の関係づけ、それらの用語の表示方法、知識資源への索引語付与の考え方と手法について述べられている。

第5章「ネットワーク知識資源のメタデータ」

本章は、ネットワーク上に存在する知識資源の組織化のみに特化して、ダブリンコアを中心に解説された章である。ネットワーク上に存在するか否かを問わず、本来は第1章から第3章で展開されたモデルの中で合わせて扱うことが可能であると考えられる。あえて分離することによって、前の3章が複雑化しすぎるのを避けるのに成功している。

おわりに

伝統的な資料組織化の知見と、FRBRや国際目録法原則といった新しい動きはともすれば、その理解の間に断裂が見えがちであるが、それらをシームレスに理解するための枠組みを提示したという意味で、非常に意欲的かつ挑戦的な著作とすることができよう。その分、あえて紙幅が割かれなかった部分もある。たとえば、「典拠コントロール」や「標準化」については言及されているものの、従来の同様の書で中心的な概念として扱われてきた「書誌コントロール」という言葉は、見た限り一度も使われていない。

本書は全体的に知識資源組織化の概説書として、モデル図や操作画面なども多く取り入れて、たいへん丁寧な説明がなされているが、それでも初学者は独力で読み解く困難さを感じてしまうかもしれない。データベース設計の手法やリレーショナルデータベースの仕組み、伝統的な資料組織化手法などに関してある程度の基本的な知識がないと分かりにくい点があるように思われる。文中あるいは巻末に見られるような関連書が、各章ごと、ないしは必要に応じて、書誌事項だけでなく解題付きで示されていてほしいと願うのは欲張りすぎだろうか。

著者らの紡ぎだす、この新感覚な情報組織化論、否、知識資源組織化論は、図書館関係者のみならず、「知識資源」のメタデータの組織化に携わるあらゆる人々にとって一読に値する書である。

(むらかみ やすこ 関西大学文学部)